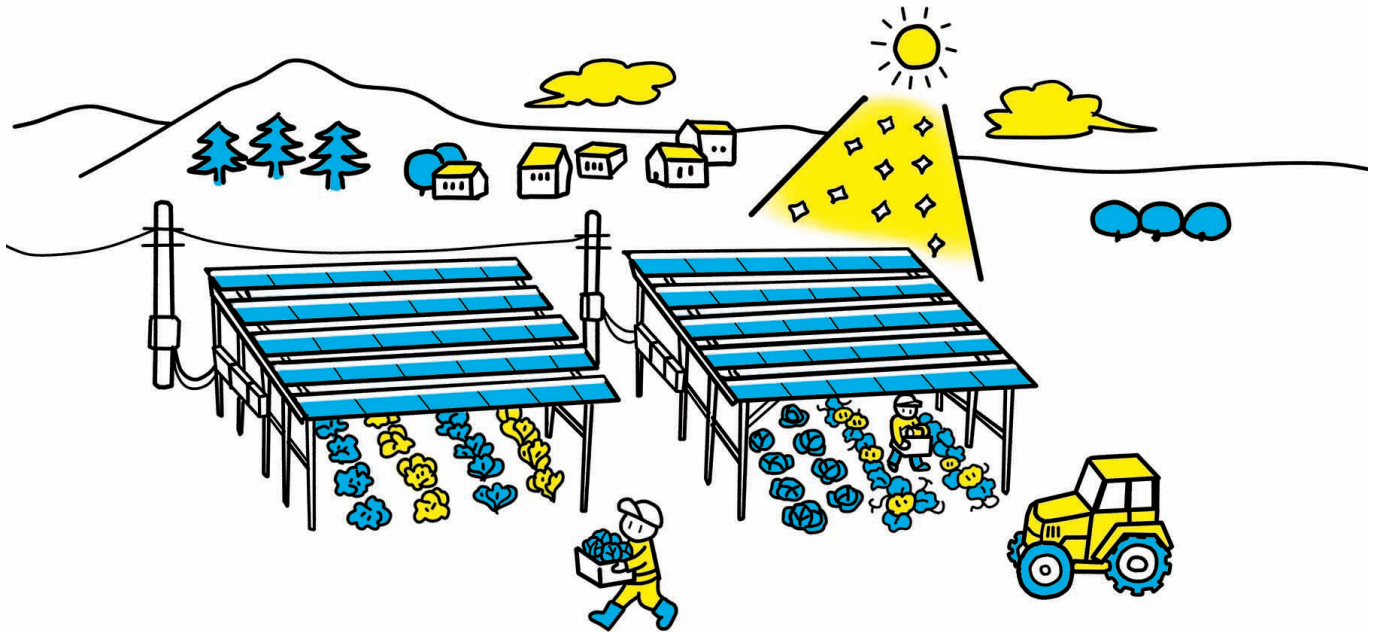


基礎講座：ソーラーシェアリングってそもそも何なの？（1）

農作物をつくりながら、電気までつくってしまう それが、これからの農業スタイル「ソーラーシェアリング」だ。太陽の恵みを余すところなく活かし切る、環境調和型システム。そこには、様々な日本の課題を解決する、大いなる可能性が満ちている。



【仕組み】農地の上に太陽光パネルそれが新しい農村の風景になる

農家の経営安定と自然エネルギーの普及を両立させる一石二鳥のシステムとして、いま多方面から期待を集めているソーラーシェアリング。少し前までは、農地法の運用が厳しく、農地を農業以外に使うことは原則としてできなかった。しかし2013年、農林水産省が一定の条件のもと、これを認める方針を打ち出したことで、着実に広まってきた。一般の認知度はまだまだ低いですが、既の実証段階を終え、いまや日本全国1000ヶ所以上で導入されているのだ。

【作物】作物に過剰な光は必要なしパネルの下でもよく育つ

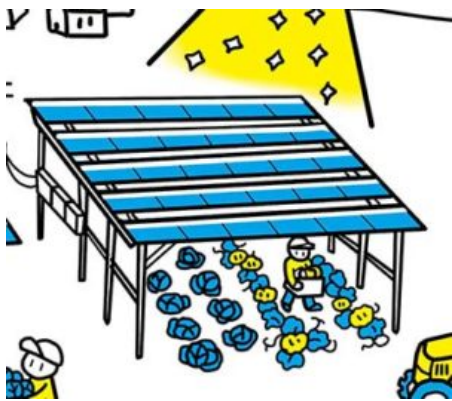
気になるのは、太陽光パネルの下で、農作物がちゃんと育つのかということだろう。しかし、心配はご無用。ソーラーシェアリングでは、一定の間隔を開けて太陽光パネルが設置されるので、生育に必要な光は十分に降り注ぐ。どの程度の間隔で太陽光パネルを設置し、どの程度の遮光率を確保すれば良いのかも実証されている。そもそも植物は、種類ごとに必要とする光の量に上限があり、強すぎる光は成育の役には立っていない。普通に栽培されている大半の野菜は、ソーラーシェアリングによって悪影響を受けることはない。むしろ遮光することで、成育状況が良くなるものも少なくないのだ。

【意義】日本農業の課題とエネルギー問題を一挙解決

長らく日本の農業は、儲からない職業とされ、後継者不足に悩まされてきた。耕作放棄地は増え続け、農村地域の活性化はままならない。一方で、地球温暖化が進み、自然エネルギーの普及加速化は世界的な要請だ。特に日本にとっては、エネルギー自給率を上げるためにも、自然エネルギーへの転換は不可欠だろう。ソーラーシェアリングには、問題解決への大きな可能性が秘められている。農家は、農地を守りながら、発電事業で安定した収入を得ることができる。農村は、環境を犠牲にすることなく、活力ある地域を蘇らせることができる。そして日本は、自然エネルギー導入拡大への新たな道筋を描くことができるのだ。

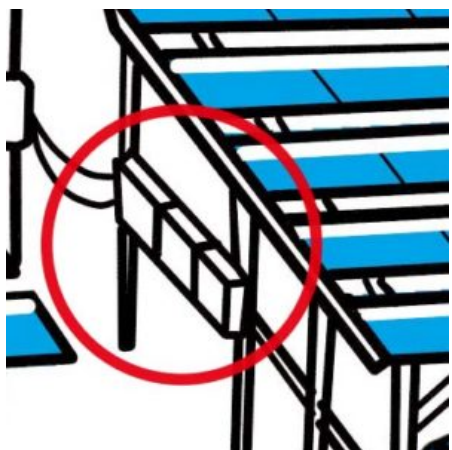
【用語解説】

太陽光パネル（太陽電池モジュール）



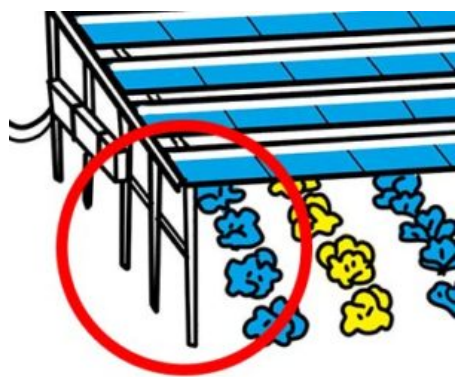
太陽の光を電力に変える、発電システムの主役。ソーラーシェアリングでは、作物に適度な光があたるよう、すき間を空けて設置される。

パワーコンディショナ



太陽光パネルで作られる「直流」の電気を、電力系統（電線）に流せる「交流」に変換する設備。

架台（支柱）



太陽光パネルを支える骨組み。トラクターなどの農業機械が支障なく動けるよう、十分な間隔をあけて立てられる。

illustration : Chisato Hroi

（「アースジャーナルvo.5」より転載 一部再編集）